様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 26 年 2 月 20 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2009～2012
課題番号：２１５２０１７７
研究課題名（和文）　季節感、季節認識に関する比較文化研究―俳句の国際化を視座として

研究課題名（英文）　A Comparative Study of Cultures: Seasonal Feelings in Haiku

研究代表者
松井　貴子（MATSUI　TAKAKO）
宇都宮大学・国際学部・教授
研究者番号：90315276

研究成果の概要（和文）：日本と異なる気候風土で、アメリカ人の俳人によって、英語で詠まれた俳句を通して、ハワイとアラスカにおける季節意識を明らかにし、俳句の国際化を推進する季節意識の普遍性を探求した。本研究は、国際学会において、文学・文化研究と日本語教育をつなぐ研究として高い評価を受けている。また、一般市民対象の講座、高校生への出張授業で、季節認識の普遍性と俳句創作について講義し、研究成果を社会に広く発信した。

研究成果の概要（英文）：This research made the seasonal awareness in Hawaii and Alaska clear and explored the universality of seasonal consciousness for the internationalization of haiku through the haiku written in English by American haiku poets. In an international conference, it was evaluated that it was an unique and interesting research topic which connected a literary and cultural study with Japanese-language education. I have lectured about the research results to adult citizens and high school students at various venues.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	500,000	150,000	650,000
22 年度	500,000	150,000	650,000
23 年度	500,000	150,000	650,000
24 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、日本文学
キーワード：近・現代文学、俳句、季節感

１．研究開始当初の背景

（1）俳句は日本を代表する文学として海外に翻訳紹介され、各国語で創作されている。俳句は作者の身辺から材料を見出し、実感を読み込む日常詠である。このような俳句の国際化にあたって問題となるのが、日本の俳句の約束事である有季定型であった。

（2）近年の英語俳句では、１７音にこだわらず、「一息で言える長さ」という定義づけが提唱され、説明しない俳句らしい作品が増えている。俳句の季節感については、これまで

様々に議論が重ねられてきたが、伝統的に日本の気候風土に根ざしたものであるために、外国人には理解できないと強調されることが多かった。

（3）外国人に通じにくい要素を取り上げて、俳句が理解されないことを強調するのは現実に進行している俳句の国際化に逆行し、阻害する。俳句の真の国際化のためには、普遍的に共有できる要素を見出し、俳句理解をより深めていくことが現実的である。

（4）国際俳句が着実に蓄積される一方で、理論的検討は実作と解離するところがあり、各国の俳句事情は印象記に近い。俳句を国際化する方策について有効性が十分に検証されていない。

２．研究の目的

（1）生活意識としての季節感、季節認識を主軸として、俳句創作における、日本と外国での季節感の相互共有の可能性を探る。

（2）俳句作品に表れる季節意識の普遍性について考察することを通して、国際的な俳句理解、俳句の真の国際化に向けての、有効な方向性を探る。

３．研究の方法

（1）日常生活の中で意識される季節感、季節認識を土台として、俳句を生活文化としてとらえる。

（2）俳句作品が詠まれた土地の気候風土について実地調査を行い、その成果と文献資料をあわせて考察を加え、実作に即して、季節認識の特質を探る。

４．研究成果

本研究では、日本の気候風土と大きく異なる創作環境、主としてハワイの冬とアラスカの夏について、日本の季節意識との比較考察を行った。日常生活の中で意識される季節感、季節認識に注目して、俳句を生活文化としてとらえ、季節認識の本質を探った。文献資料調査に加えて、作品が詠まれた地で実地調査を行い、具体的な俳句作品を通して季節意識を明らかにした。

ハワイとアラスカで詠まれた俳句作品集 *Haiku of Hawaii*（A.S. Morrow, 1970）と *Alaska in Haiku*（D. Hoopes, D. Tillion, 1972）に収録された作品のうち、特にハワイの冬の俳句とアラスカの夏の俳句について読み進めるとともに、 *Haiku in English*（H.G. Henderson, 1967）などの英文俳書、『世界大歳時記』に収録された日本人によるハワイとアラスカでの海外詠、『角川俳句大歳時記』、『カラー版新日本歳時記』、『ザ・俳句十万人歳時記』などの日本の歳時記に加えて、ハワイとアラスカの気候風土に関する文献資料、映像資料を調査した。その上で、2010 年 1 月にハワイで実地調査を行い、日本のような温帯ではないハワイで冬の俳句を作ることについて有益な知見を得ることができ、ハワイ日本文化センター他で、日本で見ることが難しい資料を新たに収集することもできた。

上記の調査をもとに、「ハワイ俳句のためのノート」（「外国文学」59 号）をまとめ、「熱帯季題小論」、ハワイの気候風土、アメリカでの俳句、ハワイの冬の俳句など、日本と気候風土の異なる地域での俳句創作に関する論点を整理した。

それから、2010 年 8 月に、ハワイとアラスカで実地調査を行い、ハワイとアラスカにおける季節意識や、日本で使われているものと同じ季語を使って俳句を作ることについて、有益な知見を得ると同時に、ハワイ大学、ハワイ日本文化センター、ビショップ博物館、アラスカ大学、アンカレジ歴史芸術博物館、アラスカ民族文化センターなどで、日本では見ることが難しい資料を新たに収集した。

これらの調査により、「アラスカ俳句のためのノート」（「外国文学」60 号）をまとめ、アラスカの気候風土、アメリカでの季節認識、アラスカの夏の季語など、日本とは異なる気候風土を持つ地域での俳句創作に関する論点を整理した。

さらに、2011年7月および2012年3月に、再度、ハワイとアラスカで現地調査を行い、ハワイとアラスカにおける季節意識について、主に夏と冬に注目して研究を進めることに加えて、夏と冬の中間に位置づけられる季節として春について考察を進めるための有益な手がかりを得た。そして、「ハワイの冬の俳句」（「宇都宮大学国際学部研究論集」33 号）において、熱帯地方にあるハワイで、アメリカ本土出身の日系ではないアメリカ人の詩人によって、英語で創作された冬の俳句の特質を明らかにした。そして、*Haiku of Hawaii* に収録されたハワイの冬の俳句に続けて、*Alaska in Haiku* に収録されたアラスカの夏の俳句について、アラスカでの実地調査をもとに検討を加え、「アラスカの夏の俳句（1)」、「アラスカの夏の俳句（2)」にまとめた。日本と異なる気候風土で詠まれた俳句作品を通して、季節感、季節認識の同質性と異質性を明らかにし、普遍性を探る考察へと視点の深化を得た。

また、アメリカでの現地調査の成果を活かして、英語で書かれた俳句入門書 *Haiku*（Donegan, 2003）を読み進め、「『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（１)」(「外国文学」56 号）に続く「『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（２)」(「外国文学」61 号)、「『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門(３)」(「外国文学」62 号）として、俳人としての実感を加えて、わかりやすい日本語に翻訳した。この翻訳を通して、英語の俳句と季節意識の特質について理解を広めることが期待できる。俳人でもある研究者として、自作句の英語への翻訳「一月の俳句―新年、そして寒」January in Haiku: The New Year and the Coldest Time of the Year も試みた。

以上の研究成果を活かして、研究テーマを、より広く、深く、多角的にし、今後の研究を発展させるための準備として、ニューヨークで近年に詠まれた俳句について考察することを考え、ニューヨークでの実地調査に着手し、当地の季節意識について新たな知見を得た。

本研究の成果は、国外では、宇都宮大学学長と同大学国際学部長の推薦を受けて、2010 年 7 月 31 日～8 月 1 日に、国立政治大学（台湾）で開催された 2010 世界日本語教育大会 International Conference on Japanese Language Education「多文化の中の日本語教育と日本研究」において、「俳句の特質と季節認識―多文化への発信」という題目で、主催者招待による口頭発表を行い、多くの研究者と意見交換をした。この国際学会で、本研究は、日本文学研究として優れているだけでなく、文学研究、文化研究の枠を超えて、日本語教育と他分野をつなぐ重要な研究であると、高く評価された。

国内では、高校生と一般市民に向けて、研究成果を発信した。茨城県立日立北高等学校と大成女子高等学校（茨城県水戸市）の生徒に「俳句を読み解く―季節感・発見・感動／小さくて大きな世界」と題して、本研究の成果を活かして、日常詠であり、自分の思いを綴る生活詩でもある俳句の季節意識についてわかりやすく講義し、俳句への興味を引き出した。一般市民を対象としたワークショップ「絵画の写生・ことばの写生―絵からはじまる俳句入門」（横須賀美術館）と講演「季節感を作り出すもの―絵の中の四季」(栃木県立美術館）では、日本と外国の美術作品から、季節意識の普遍性について考え、俳句創作を実践した。これらを通して、社会に向けて、幅広い年代に、科研費による研究成果を公開することができた。

今後は、本研究を土台として、対象地域をハワイとアラスカから、北米、ヨーロッパ、南半球などへと拡大し、外国で詠まれた俳句

作品を、実地調査と文献資料、図像資料を基に検討することを継続して、季節認識の普遍性についてさらに深く考察し、日本と外国の同質性と異質性という視点から、美術作品を加えて考察を進めることを考えている。

日常の行動や実感と結びついた日本と外国の生活文化を、多文化間の同質性と異質性という視点から比較研究することで、日本文化を相対化し、その特質を明らかにすることが期待できる。世界の多文化の中で日本文化を相対的にとらえて、その特質を明らかにすることは、政治や経済とは異なる観点から、国際社会における日本の位置づけを明確にすることにつながる。今後の研究によって、世界の中の日本文化として、日本文化を発信する人材の育成に寄与することを目指したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）
①松井貴子、アラスカの夏の俳句（2）、宇都宮大学国際学部研究論集、査読無、35 号、2013、1－8
②松井貴子、アラスカの夏の俳句（1）、宇都宮大学国際学部研究論集、査読無、34 号、2012、83－88
③松井貴子、ハワイの冬の俳句、宇都宮大学国際学部研究論集、査読無、33 号、2012、47－53
④松井貴子、アラスカ俳句のためのノート、外国文学、査読無、60 号、2011、67－81
⑤松井貴子、俳句の特質と季節認識―多文化への発信、2010 世界日本語教育大会「多文化の中の日本語教育と日本研究」、査読無（学長推薦）、2010（招待発表と論文集 DVD）
⑥松井貴子、ハワイ俳句のためのノート、外国文学、査読無、59 号、2010、75－84

〔学会発表〕（計 2 件）
①松井貴子、「俳句の特質と季節認識―多文化への発信」　2010 世界日本語教育大会 International Conference on Japanese Language Education「多文化の中の日本語教育と日本研究」　2011 年 7 月 31 日―8 月 1 日　於台湾国立政治大学（主催者招待による口頭発表）

〔その他〕
翻訳等
①松井貴子、『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（３）、外国文学、査読無、62 号、2013、131－134
②松井貴子、『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（２）、外国文学、査読無、61 号、2012、109－111
③松井貴子、一月の俳句―新年、そして寒 January in Haiku: The New Year and the Coldest Time of the Year、外国文学、査読無、62 号、2013、97－98
講演・ワークショップ・出張講義等
①松井貴子、開館 40 周年企画「ゆく河の流れ―美術と旅と物語」展講演「季節感を作り出すもの―絵の中の四季、2012 年 11 月 11 日、栃木県立美術館
②松井貴子、「正岡子規と美術」展ワークショップ 絵画の写生・ことばの写生―絵からはじまる俳句入門、2012 年 3 月 3 日、横須賀美術館
③松井貴子、高校生への模擬授業：俳句を読み解く―季節感・発見・感動／小さくて大きな世界、2013 年 2 月 14 日、大成女子高等学校（茨城県水戸市）
④松井貴子、俳句を読み解く―季節感・発見・感動／小さくて大きな世界、茨城県立日立北高等学校生徒への模擬授業（依頼講義）、2011 年 10 月 27 日、宇都宮大学

６．研究組織
(1)研究代表者
松井　貴子（MATSUI TAKAKO）
宇都宮大学・国際学部・教授
研究者番号：90315276

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：